



2018. 9. 30

No.209

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

## 北海道胆振東部地震とブラックアウト



9月8日夕方 電気がついた家々と夕焼け

胆振東部地震で被害に遭われた読者のみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

地震が起こる前、9月4日深夜から5日明け方にかけて、激しい暴風雨でした。庭のリンゴの木の枝が2本折れていました。その怖さが冷めやらぬ6日午前3時8分、今まで体験したことのない大きな地震の揺れが起きました。一階の物が落下しているのでは？と家族でおそろおそろ降りると、軽い雑貨は落ちていましたが食器類も本棚の本も一冊も落ちずに無事でした。外ではいろいろなものが飛んでいました。その時点ではテレビが付き、ニュース速報が流れて江別は震度5強と知りました。その後停電。深夜に見たオリオン座と天の川の美しさが忘れられません。周りに全く灯がなく、空は澄みきっていて星が輝いていました。家族で同じ星を見ていました。何があっても力を合わせて生きていこうと思えた夜でした。

懐中電灯やヘッドランプ、ラジオを用意しそのまま眠れぬままに朝を迎えました。どこでどんな被害があったのか、情報が入らないので不安が募りました。でも水もガスも使えたのは助かりました。後で知ったのですが、江別市内でも断水した地域が多数あったようです。携帯をなんとか充電しなければと、自宅から一番近い野幌公民館に行ってみると市役所で充電できることを知りました。私も長蛇の列に並び、3台

を充電。少し安心しましたが電気は復旧しませんでした。

7日、終日ラジオを聴いていましたが、札幌の情報はあっても江別のことはまったく伝わってきませんでした。スマホなどのネットを使えた人は少数だと思います。夕方には電気が復旧しそうだという話は伝え聞きましたが夜の8時になっても真っ暗でした。信号機が機能していません、幹線道路では、多くの警察官が交通整理をしていました。信号機が真っ暗で、おまわりさんもない所では、この時とばかりに、スピードを出して運転する人がいて怖かったです。江別でも病院や市役所に近い地域は7日に復旧していたようです。

8日午前0時45分、ようやく電気が復旧してホッとしました。新聞記事は読んでいましたが、厚真町やむかわ町の大変な被害を知ったのは8日のテレビニュースでした。むかわ町は父の転勤先で懐かしい土地。自然豊かで、夫婦で何度も星見やマガンの渡りをに見に行った場所です。その日の夕方、近くの公園では子どもたちが遊んでいました。日常を取り戻した風景でした。(写真)家々の灯りが嬉しかったです。「おいしいね」から元気になる場「クッキングハウス」(調布市)から地震のお見舞い、クッキーやコーヒー、バターなどが届き感激しました。

今回、道内全域で停電というブラックアウトが起きたのは、厚真火力発電所1カ所に供給を集中させていたことが原因でした。東日本大震災が起きたときに、その危険性が指摘されていたのに、それから7年半、分散型の発電所へ変えていく努力をしなかったツケが回ったとしか思えません。道や北電は今回を機に、住民の安全を第一に考えて頂きたいです。危険な泊原発はいりません。

10月9日、泊原発訴訟口頭弁論で、今回のブラックアウトを体験して「北海道胆振東部地震で明らかになった泊原発の大きな問題点」について私が意見陳述します。是非、傍聴をお願いします。札幌地裁に13時半までにお集まりください。

原告の樋口みな子です。私は泊原発の廃炉をめざす会で、2011年12月から今年6月までの6年半、ハイロニュースの編集を担当しました。1986年に起きたチェルノブイリ原発事故は忘れることが出来ません。遠く離れた北海道にも放射性物質が降り注ぎました。事故の数日後に子どもを出産しましたが、どれほど安全な食品に気を配って暮らしていたかを思い出します。原発の危険性を伝えたいという動機からミニコミ紙「銀河通信」を発行してちょうど30年になります。

9月6日未明に起きた最大震度7の北海道胆振東部地震で、北電は道内全域でブラックアウトを引き起こしました。自宅は江別ですが丸二日間停電になりました。交通機関はすっかりマヒし、スーパーもコンビニも閉店し、食料が手に入りませんでした。情報は乾電池で聴くラジオだけでした。信号のない真っ暗な道の怖さがどんなものか、初めて知りました。今回はそのブラックアウトでわかったことに絞って意見陳述します。

北電の苫東厚真火力発電所は2号機（60万キロワット）と4号機（70万キロワット）が高温の水蒸気を運ぶ細長いボイラー管が縦揺れに耐えきれず損傷し、停止しました。稼働していた1号機（35万キロワット）も17分後に停止しました。このため、北海道の全発電量の約半分が失われ、電力の需給バランスが崩れて前代未聞のブラックアウトが起きました。運転停止中の泊原発は外部電源が約9時間半も喪失し、その間、非常用電源が作動して使用済み燃料プールにある核燃料の冷却を続けました。もし非常用電源にトラブルが生じていたら、プールは沸騰し、使用済み核燃料は臨界に達したかもしれません。この時、泊での震度はわずか2でした。泊で大地震が起きて泊原発が外部電力を喪失する事態は想定されていたかもしれませんが、泊から遠く離れた場所で起きた地震で全道的なブラックアウトが生じ、泊で外部電源が何時間も失われることは、全く想定されていませんでした。北電は、この裁判でも、泊原発はあらゆる危険に対策を講じているから安全、と主張してきましたが、こんなに遠く離れた地震で、外部電源がいつも簡単に喪失してしまうことは、想定すらできていなかったのです。

今回、もし泊原発が再稼働していたらどうなっただけでしょうか？プールに入ってある程度冷やされている使用済み核燃料の冷却と、稼働中の原発の冷却とはまったく異なります。7年前、東日本大震災で、外部電源を全て消失した福島第一原発が次々にメルトダウンした大事故で、普通に暮らしていた福島の人々の日常は失われてしまいました。避難した人、避難しなかった人たちに日常が戻ったのでしょうか？いまだに原発事故は収束してはいません。今回、ブラック

アウトを体験して、原発は廃炉にしなければ本当の安全、安心な社会は望めないと思いました。

第二に、今回の事故で重大なことは、地震によって苫東厚真火力発電の2、4号機が停止してから1号機が停止するまでに17分も時間がたったことです。北電は、道内最大の火力発電所が地震で急に停止することを想定していたのでしょうか？多くの専門家が指摘していますが、電力の需給バランスを調整するために、緊急に一部の電力を切ってバランスをとることで、周波数を乱さないようにすれば、ブラックアウトを回避できたのではないのでしょうか。北電は、いざというときの備えが万全であったとは言えません。詳しくは、政府が設置した第三者委員会で明らかにされると思いますが、北電がこのような事態を想定すらしていなかったのに、速やかな対応が出来ず、ブラックアウトを引き起こしてしまったといえるのではないのでしょうか。今回の出来事は、そもそも北電には、すべてに対して想定が甘く、外部電源喪失が続けばメルトダウンする原発を安全に管理する能力も、管理体制もなかったのだ、という事実を、はからずも全国の人々に明らかにしたと思います。

第三に、今回の地震は、専門家も想定していなかった場所で起きたということです。通常は直下型の地震は10km程度の浅い場所で起きるとされていたのに、今回は37kmの深いところで起き、山崩れのようなすごい被害をもたらしました。地震と関連した可能性のある石狩低地帯東縁断層は、東洋大の渡辺満久教授が指摘している泊の沖合の海底断層とよく似ていて、東に傾斜する逆断層です。ですから、もし、泊で、同じように東に傾いた断層の深いところで今回のような直下型地震が起きれば、それはまさに泊原発の直下にもなり、小刻みの縦揺れが、配管だらけの原発に大きな被害を与えるでしょう。

最後に、29年前「北電への手紙」という本に寄稿させていただいた文章の一部を紹介します。「もし泊で事故が起きたら、一番最初に被害を受けるのは幼い子どもたちです。ひとたび事故があれば海を汚し、空気を汚し大地を汚し、食べ物を通してわが子の体にも蓄積されていくでしょう。（略）泊村にも行ってみました。とってもきれいな海岸線で、なぜここに原発がと胸を衝かれました。ふと水俣を思いました。不知火海はとても美しい魚も良くとれる海だそうです。その海に、チッソ工場から有機水銀が流されたのです。それは目には見えないし、臭いもないし（まるで原発と同じですね）誰も気づかなかつたのです（チッソ以外は）。そうして、汚染された魚を食べつづけた人びとが次々と水俣病に

なったのです。胎児性水俣病まで生み出しました。（略）泊原発を止めてください。もしあなたが家族を愛しているのならば」

今回、泊原発が稼働していたら大変な事故になっていたかもしれません。危険な泊原発は一日も早く廃炉にと訴えます。裁判長には公正な判断をお願いします。（10月9日札幌地裁）

## 講演「声なき声に耳を傾けて」

講師：大久保真紀（朝日新聞編集委員）



「日本人を特別に恨んでいるわけではない。でも売られて、病気にかかって死んでいく私のような少女がたくさんいることを知ってほしい」。

1996年4月13日付朝日新聞夕刊1面に掲載された大久保さんの記事は大きな反響を呼んだ。東南アジアで横行する子どもの買春

講演する大久保真紀さん  
撮影・石井一弘さん

についてのルポ。日本人が加害者となっているケースもあると聞きつけ、大久保さんは現地に赴いた。

ミャンマー出身のミーチャは12歳のときに売られ、タイの売春街に連れて行かれた。それから8年。大久保さんの取材に応じたときには、すでにエイズが体を蝕んでいた。9ヶ月後、ミーチャは帰らぬ人となる。

しかし、ミーチャの声は確実に日本に届いていた。NPO法人「かものはしプロジェクト」はカンボジアやインドで貧困女性の就労支援をしている。理事長の村田早耶香さんは、大学時代に大久保さんの記事を読み団体を立ち上げた。

当時、「買春」という言葉を紙面で使うこと自体、社内で抵抗があったと大久保さんは述懐する。記事をきっかけに「買う方が悪い」という考え方が浸透し、支援の輪が少しずつ広がっていった。

その後、厚生労働省の担当になった大久保さんは児童養護施設における虐待について取材を始める。その中で出会ったのが彩美（あやみ）だ。

幼くして母親を亡くした彩美は、児童養護施設で育った。しかし、虐待を受けた上、施設を追い出される。父親に助けを求めたが「捨てられ」、援助交際で日銭を稼ぎ、シンナーや覚醒剤に溺れる日々を送っていた。

彩美を「預かってほしい」と頼まれたこともある。しかし、利害関係者になったら記事は書けない。断腸の思いで断り、婦人相談所に行っただろうかと提案した。大久保さんは2013年4月28日付朝日新聞朝刊掲載の「ザ・コラム」でそのときのことをこう振り返っている。「彩美は数秒黙した後つぶやくように言った。『わかった。だけど、会いに来てくれる？』。私が彩美に救われた」

出会った当初「大人になるまでに死にたい」-3-

と言っていた彩美は今年38歳。大手百貨店で正社員として働いている。大久保さんとは今でも一緒に食事に行く仲だという。

東日本大震災の数日後には、津波で大きな被害にあった岩手県陸前高田市に入った。震災当日、市民会館に避難し奇跡的に助かった女子高生を取材する。「おいしいネタをもらって終わりではない」。記事が出てからも、避難所生活を続ける女の子のもとへ通った。

取材相手とどのように人間関係を築くか。具体的かつ実践的な内容で、記者人生の指針となるようなヒントが多く含まれていた。質疑応答では、大久保さんが鹿児島総局次長として警察の「でっちあげ」捜査を暴いた志布志事件について詳説。大久保さんはつねに立場の弱い人に寄り添いながら、取材を続けてきた。話しながら何度か感極まって声を詰まらせる場面もあった。記者を志す学生はもちろん、広くジャーナリズムの世界に関心がある人にとって、心に響く講演だったことは間違いない。（北海道大学4年藤谷和廣）

（2018年7月21日 さっぽろ自由学校「遊」講座 記者たちの白熱教室—ジャーナリストを目指す君へ）

この記事を書いた藤谷和廣さんは来春から新聞記者として働く予定です。

## さまざまな活動を通して考えたこと

館崎 やよい

30周年おめでとうございます。1970年代の無添加無農薬の共同購入から始まり具体的な活動は1988年の泊道民投票条例の時からです。銀河通信と同じ年代の道を歩いてきたのですね。

40代でスタートした私も70後半にさしかかり、いままでのようなわけがいかなくなりました。今は、納戸にしまいこまれていた活動の通信やらスクラップ類を整理することに時間をかけてます。30年分の整理となると、かなりの体力が必要です。

一人三役。NPO法人がらだする、苫小牧の自然を守る会、ヒロシマ・ナガサキそしてフクシマを語り継ぐ会代表です。其々振り分けてやってきたのですが、仲間は、其々優先するものがあり、専属で動くのは私だけです。文字通りの孤軍奮闘。しかし、ひとりではできなかった。その時々多くの人の協力で今日までやってきました。我ながら驚くほどの取り組みをこなしてきました。原発反対運動からはじまり、千歳川放水路反対、ITER（国際熱核融合実験炉）の誘致反対、3・11の核ごみ受け入れ反対など大きな運動に加えゴミ有料化や焼却問題など大小さまざまな活動に日々追われてきました。一番、手ごたえのあったのは、エンデの遺言に触発された地域通貨運動です。あのときは、新聞、TV、本等々色々な媒体で広報されました。自分の力で世の中を変えることはできるは

ずもなくどんどん音を立てて崩れていくような地球環境。そして人間の心の崩壊。しかし、どんな時でも、前をカブよく走ってくれる人がいる。これからはその人たちの後につき協力し、応援していきたいです。幸いにも私に残された仕事がありました。「食は命」。食環境を守りたくて活動を開始した40年前に志を戻し、月一回のコミレス「地域の茶の間がる」を通して街づくりや環境問題に向き合っていきます。せめて遺言が残せるように。(苫小牧市・NPO法人がるだする代表)

## 病気があっても一人の人間として尊ばれ、その人らしく生きていく権利が守られる社会をつくりたい

浅川身奈栄



左から増子捷二さん、一人おいて井上昌和さんと浅川身奈栄さん夫妻

銀河通信30周年、誠におめでとうございます。樋口さんが息の長い活動を続けてこられたことに敬意を表します。

30年前といえ、私は日本最北花の浮島、礼文島で、駆け出しの中

学校教員として、充実した日々を送っていました。専門の家庭科の他に、僻地教育のため音楽と体育という技能教科ばかりを受け持っていました(楽しかった!)。さらに女子卓球部を担当し夏場はほとんど休みのない生活を5年間続け、年1回行われる礼文島の駅伝大会では、中学生に負けず区間賞を取るなど活躍?していました。当時、働きながら小学校の教員免許を通信教育で取得し、その後、稚内市の小学校へ異動。夫、井上とは以前から顔見知りでしたが、稚内で生活する中で、縁があって1994年に結婚しました。今から24年前のことです。当時夫は稚内木馬館という障害者の働く施設で指導員をしていましたが、結婚する直前に血友病という生まれつきの病気を持っていることを知り「大変な子ども時代を送ってきた人なんだな」と感心しました。人一倍元気で、仕事のほかに様々な活動に取り組む姿を見ていたので、そんな大変な持病を持っている人だとは全く気付かなかったからです。

国内の血友病患者の4割が被害にあった薬害エイズ事件、夫がその被害者だったことを知ったのは結婚から2年が経ったときでした。「薬害エイズについて知って欲しい、共に考えて欲しい」と、職場の同僚や、青年運動・平和運動に取り組んでいた仲間たちの協力を得て、「薬害エイズを考える会」の活動を始め、今年で22年が経ちます。結成当初は、稚内で一人芝居「冬の銀河」や川田悦子さんを招いた講演会などにも取り組みました。

しかし当時、夫の身体は病魔に侵され、札幌

へ転居して本格的な治療を開始しようとした矢先に倒れました。通常1000~1500といわれる免疫を表す数値CD4がたったの「4」まで下がり、生きるか死ぬかという状況の中、私は介護休暇を取り、付きっきりで看病をしました。1997年のことです。「元気になったらまたバリバリ働こう、でも今はまずは、生き永らえなくては!」と二人で話し合い、私は休職のまま退職し、夫の闘病を支える道を選びました。その選択は正しかったと今、改めて感じています。当時は私が仕事を辞めることを家族から反対され、しばらく断絶状態になるなど辛い日々を過ごしました。

ハンセン病問題に出会ったのは、夫が少し元気になって大学院に復学し、北海道難病連に週1回の実習に通っていた時です。当時事務局長の伊藤たておさんから、ハンセン病問題について伺い、見えない壁で患者を隔離した「エイズ予防法」に瓜二つの「らい予防法」があったことを知りました。それから全国の療養所訪問を開始し、回復者の方のお話を聞き、ハンセン病国賠訴訟の支援などにも取り組みました。その活動の様子は、薬害エイズを考える会の会報の中で紹介するなどしてきましたが、ハンセン病問題や薬害ヤコブ病訴訟の支援に関わる中で大きな勇気をもらい、2002年5月に夫が薬害エイズ被害者として実名公表し、その直後に「ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会」を結成しました。

夫が感染を告知された当時は、「HIV感染/AIDS=死」という病気でしたが、この間、治療は劇的に進歩し、HIVを叩く治療薬を服用することにより、血液検査で検出限界以下に抑えCD4が300~400位までに回復しています。今のところ抗HIV薬は一生飲み続けなければなりません。重複感染していたC型肝炎の方は10数年続けてきたインターフェロン治療によりようやくピリオドを打つことができました。それは、昨年12月から3カ月間、新薬を服用しHCVを排除することに成功したことです。肝硬変の診断は受けていますが、肝炎ウイルスを排除できたことはとても大きなことです。私は現在夫と共にライフワークとして、薬害問題・ハンセン病問題に取り組みながら、日々の生業は「難病患者就職サポーター」というハローワークの就労支援の相談員になり丸5年が経ちました。「第2の薬害エイズ」と言われた薬害ヤコブ病訴訟の支援からヤコブ病サポートネットワークの相談員に携わった経験を活かし、今の仕事に就くことができました。この私の30年間を振り返った時に、「病気があっても一人の人間として尊ばれ、その人らしく生きていく権利が守られる社会をつくること」が私の当面の目標、生きる意味なのかなと考えています。

(薬害エイズを考える会&ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会共同代表)

## 「銀河通信30年」そして私の 25年、50年・・・ 増子捷二



故郷・斜里岳の雄姿

★「30年！」という尺度は長い？短い？それは当然その尺度を測る対象によって違います。「銀河通信」は、樋口さんが「1986年に起きたチェルノブイリ原発事故に衝撃を受け、『原発の無い社会で暮らしたい』と強く思い、自然保護の市民運動で出会った友人達に小さな声を届けることから始めた」とお聞きしました。

とにかく30年はすごい！「継続は力なり」の生きた典型を毎回感じて読んでいます。さらに、読者が増え続けて600人になったとのこと。友人、知人はさておき、面識もない多くの方は、面白くなければ止めてしまいます。つまり「銀河通信」は、その視野の広さと取り上げる題材の多様さ、本質に迫る文章の迫力がとても優れているから読者が増えているのでしょう。★私が末っ子の6人兄弟姉妹は皆元気で、知床の近く、斜里岳の麓で育ちました。電気も水道も無い開拓農家で、それなりに苦勞もしましたが、共通の思い出も多く、25年前に兄弟姉妹とその連れ合い、子ども等を含めて20数人が大雪山に集まった機会に出した「斜里岳の見える家」通信が今年で100号です。

★そして50年！人生はひよんな事の連続。その一つとしてひよんな事から「うたごえ運動」に首を突っ込んでから50年。「原水禁運動」、「母親運動」と並んで日本の三大運動！として世界に知られている、という話は聞いていましたが、何回かの海外公演に出かけてそれを実感しました。来年は「北海道のうたごえ運動70周年」。これを記念して冊子の発行を計画中です。何とかこの運動の蓄積と成果を次世代に残して行きたいと思っています。

(札幌市・北海道合唱団)

### 継続は力なり 吉井仁

青年よ強くなれ 牛の如く 象の如く 強くなれ  
真に強いとは 一道を生き抜く事である  
性格の弱さを悲しむなかれ 性格の強さを必ずしも誇るに足らず

念願は人格を決定す 継続は力なり 真の強さは正しい念願を貫くにある

怒って腕力をふるうが如きは弱者の至れるものである

悪友の誘惑によって墮落するが如きは弱者の標本である

青年よ強くなれ 大きくなれ

汝よ 大きなことをしようとはしてはならない

大きなことよりも真実がいい

名利貪欲に走ってはいけない

静かに 静かに いらぬこと いらぬ言葉

そうしたことに時を費やさず  
教えを忠実に聞きつつ 一筋の道を歩ませて  
頂くべきである

国土に 家に 周辺の人の中に 何を残して  
今日一日を送るのか

平凡でもいい 一筋道をゆけ 職業でも 勉学でも 信仰でも ただ一本道を走ってゆけ  
一心になった時 何かが出る 一本道になった時 腰が決まる

腰が決まった時 その心に輝きが出る 輝く心は喜びを感じる

一つの念が生まれる 何年続きました 十年続いたと聞く時に その中心には誰かがいる  
一本道を歩まずにはいられぬ誰かがいる  
幾度も熱涙をかみしめて すべてを忍んだ人がある

中心人物がいて 自分の事のように何でもやる 一心になる

腰掛気分や 名利のために動く者に大した人物はいない 住岡 夜晃

「銀河通信」創刊30周年おめでとうございます!!祝賀に際して、すぐさま思いついたのが「継続は力なり」でした。座右の銘の1つとして有名な言葉ですが、恥ずかしながら誰の言葉なのか知りませんでした。調べてみたら元教員であり、宗教家でもあった住岡夜晃さん(本名 住岡郁三)の素晴らしい詩でした。まさに樋口さんが30年間も継続してきた「想い」を表した詩だと感嘆しながら読みました。その想いとは裏腹な事象が蔓延る永田町、霞が関のオッチャン達、政権与党のお友達にも銀河通信と、この詩が届く事を願って止みません。特に末尾を。その日まで継続されることを微力ながら応援しております。

(朝日新聞札幌中央販売取締役営業本部長)

### 辺野古の合い言葉 は決してあきらめないこと 水野隆夫



30年前、私は利尻礼

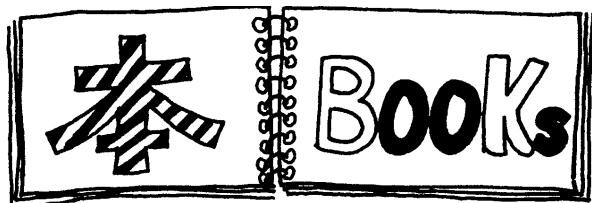
文サロベツ国立公園の自然保護官で稚内に住んでいた。当時、稚内北星短大教授で童話作家の加藤多一さんと出会い子どもの本のつどい宗谷大会で多くの友人が出来た。加藤さんは3年前、高文研から「兄は沖縄で死んだ」を出版。沖縄で戦死した兄さんの足跡を辿り今の沖縄の現実を知り戦争と平和を考えた異色のエッセイ。私は取材に協力し同行した。一読をお勧めします。私へ直接申し込みを。090-1944-0345 著者割引と送料当方負担。1500円。ゆうちょ銀行・口座名「泡瀬干潟大好きクラブ」口座番号01750-2-74545

6月12日、シンガポールで歴史的な米朝首脳会談が開かれた日、沖縄防衛局は大浦湾の一部を埋め立てる土砂を投入すると沖縄県に通知して、辺野古の基地建設に反対する人

々に大きな衝撃を与えた。大浦湾は複雑で多様な生態系が見られ、約5000種の生物が記録されそのうちなんと4割もの2000種が、貴重な絶滅危惧種である。今、辺野古の新基地建設反対運動を闘っている人々が勝つための合い言葉は決してあきらめないこと。

しかし私は辺野古で勝つには県外に沖縄で起きていること、沖縄人々の怒り、悲しみを辺野古基金で全国の主な公立図書館に琉球新報、沖縄タイムスを2年間購読料を寄付することを強く提案している。それから政府忖度が激しいNHKをしっかり監視しチェックする必要性を声高く主張したい。NHKの視聴者コールセンター(0570-2-74545)に気軽に電話しよう。公正な放送と辺野古の大浦湾の貴重な自然について、放送するよう各地からの強い要請をお願いしたい。また、この一文へのご感想などよろしく願います。

(沖縄県今帰仁村・泡瀬干潟大好きクラブ代表)



がいなもん 松浦武四郎一代

河治和香著 小学館 1,836円

今年は北海道命名150年になります。北海道博物館で松浦武四郎展を観てきました。

松浦武四郎は「北加伊道」を提案していたようです。カイという言葉には「この地で生まれたもの」という意味があるとアイヌの古者から教えられたという記述が「手塩日誌」にあるとのこと。アイヌに敬意を払っていたことが伝わってきますね。武四郎は6回蝦夷地踏査を行ない、アイヌ民族の協力がなければ踏査は不可能だったと書いています。とにかく「見る、集める、伝える」に情熱を傾けた旅の巨人の生涯でした。詳細な地図、旅先で描いた絵、達筆な字と具体的な文章に圧倒されました。生前、80件もの地図や紀行文を出版したというのも驚きでした。

本書は偉人伝とは趣が違ふ、奇人にしてがいなもん(途方もない)武四郎の一代記です。蝦夷地の奥地まで踏み込み、土地の名前を調べアイヌの人々の風俗を記録し、幕府にアイヌの救済を訴えた探検家でした。武四郎の波瀾万丈の人生が生き生きと描かれます。

物語の舞台は、武四郎が河鍋暁斎に描かせた大作「武四郎涅槃図」制作中の明治初期。絵の完成をせかしに来る武四郎が、暁斎の娘、豊に語る幼少期からの生涯が、まるで落語を聞くようでユーモラスで楽しい。

故郷の伊勢国を16歳で家出。9年かけて本州、四国、九州を歩きました。小柄ながら神足歩行術で1日60キロ近く歩いた話がすごい。

アイヌに敬意を持っていた武四郎は松前藩と商人によるアイヌの人々への不正と搾取に怒ります。武四郎の反骨が痛快。武四郎に北海道の地形や文化を学びながら自分が踏査したように語る役人もいたとか。官職を辞し生涯探検家を貫いたところも、まさに「がいなもん」でした。過酷な運命に翻弄されたアイヌの美少女との交流も描かれます。晩年の武四郎は北海道について語ることはなかったそうです。アイヌの人たちに申し訳ないという気持ちを持ち続けていたのかも知れませんね。

### 引き裂かれた青春 戦争と国家秘密

北大生・宮澤弘幸「スパイ冤罪事件」の真相を広める会編  
花伝社2,700円(2014年刊)

1941年12月8日、太平洋戦争開戦。明朗快活な北大生・宮澤弘幸さんは、この日、開戦の報を聞いて北大英語教師のレーン夫妻宅を訪れたとき、夫妻とともにスパイ容疑で検挙されました。宮澤さんは暗黒裁判で懲役15年を課せられ、その将来と命を奪われました。レーン夫妻は平和主義者でした。冤罪の真相を詳細に検証したのが本書です。

「いったん強力な情報統制法が出来てしまえば、特高警察や刑事司法という権力が、戦争遂行のため、立法時の歯止めをいかに簡単にかなぐり捨てて不条理な適用を市民の身に加えるか、最悪の実例の一つがこの事件である。(略)統制法規というものは、人権に配慮するかのよう美しい装いをまとって成立するが、成立した途端に臆面もなく装いを脱ぎ棄てて独り歩きをし始めることが、この事件ではっきりとわかる」と藤森研さんは序文で指摘しています。

多くの市民が反対した秘密保護法が強行成立しました。この本は、秘密立法がいかに危険な独り歩きをするものかを、実証的に明らかにしています。さらには「共謀罪法」も成立して、ますます市民への監視を強めようとしています。宮澤さんがスパイでないことは明らかでした。しかし、あっという間に周りの人たちに疑念をもたらし、人間関係も、未来ある人生も破壊することがよく理解できました。

8月にNHKで「自由はこうして奪われた～治安維持法・10万人の記録」が放映されました。取り締まりの対象を共産党員から一般市民までに拡大していく過程をその適用時期などの詳細なデータで迎いました。こういう検証はとても大事だと思いました。

宮澤さんの妹、秋間美江子さんや真相を広める会と共に北大への働きかけで2014年に宮澤さんの名誉回復を果たしました。家族はこの日をどんなに待ち望んだでしょう。時代を逆行させてはならないと思います。

引き裂かれた青春





## 現場とつながる学者人生 市民環境運動と共に半世紀

石田紀郎著 藤原書店 3,024円

元京都大学教授でNPO法人市民環境研究所代表理事の石田紀郎さんが、公害や環境破壊の現場で調査や被害者支援に奔走した半生を「現場とつながる学者人生」にまとめました。

本書では、これまでの活動を7章に分けて紹介。「研究者とは、科学とはどうあるべきか」を問いながら、現場や被害者に寄り添った体験を振り返りました。原発事故や、国内の大学で軍事研究が広がりかねない現状に対する思いも率直に書いています。石田さんは自分の研究が社会とどう関わっているか、さまざまな問題に科学者としてどう向き合ってきたかを、平易な言葉で綴っています。

石田さんは京都大学で農学を学び、学生運動にも関わりました。長く大学の助手を務め、東大自主講座の宇井純さんや中西準子さん、熊本の原田正純さんらの仲間のありがたさを語っています。1970年代から各地の公害現場を巡り、汚染物質を調査し、琵琶湖での調査は、合成洗剤追放運動に発展します。中央アジアのアラル海的环境破壊も調査し、今もアラル海で植林を続けています。和歌山県で農薬訴訟を起こした農家支援から始まった省農薬のミカン栽培は現在も続いています。福島原発事故後は市民環境研究所で放射能汚染測定グループを立ち上げ、汚染土壌の測定で被災者を支援しています。

学者という硬いイメージはなく市民運動のリーダーとして活躍してきたことに、親しみと敬意を覚えました。住民運動史としても興味深かったです。



## フェイクと憎悪

永田浩三 編著 大月書店 1,944円

「反日」「嫌韓・嫌中」といった用語が普通に広まっています。そんな現代の言論状況に対し、研究者やジャーナリスト、書店員ら12人がさまざまな角度から、検証したのが本書です。

沖縄の基地反対運動をデマと偏見で捻じ曲げた報道もありました。「ニュース女子」は昨年1月、基地に反対する人たちを「過激で犯罪行為を繰り返す集団」とし、基地反対運動を支援をしていた人権団体「のりこえねっと」の共同代表である辛淑玉（シン・スゴ）さんをデマで攻撃したため、辛さんはこの放送により、ドイツでの避難生活を余儀なくされました。植村隆さんも慰安婦問題で捏造記者と書かれ、大学教授の道を断たれました。

権力にすり寄り右傾化するマスメディアが社

会の分断に拍車をかける現状に筆者らは警鐘を鳴らします。

バッシングされても、自分の疑問をまっすぐ問い続ける望月依塑子さんの登場にどれほど胸がすいたかしれません。これぞジャーナリストの役割ではないでしょうか？

編著の永田浩三さんは「ジャーナリズムは声をあげられないひとのためにある。しかもそれは、ジャーナリストだけでは成り立たずよりよき読者・視聴者があってはじめて成立する。道は険しいが、事実を追い求めることを大切に思い、事実がわれわれを鍛えることを信じて歩いていきたい」と述べています。私も情報を鵜呑みにせず、事実を確かめる努力をしなければと思いました。

## 六年の後(のち) - 『一陽来復』を観て 笹森美帆



「時は3月11日の、忘れもしない大震災 千年一度の大地震 誰が思うかあの津波…」オープニングの『あの日あの時 甚句』の歌声と、

9.1 上映会場で左から筆者、尹美亜（ユン・ミア）監督、樋口

2秒ごとに切り取られ、移り変わるスローモーションの動画像に、ハッとさせられる。

寒さに白くたちのぼる牛の息。たなびく煙と熱れ落ちる夕陽。諦念の眼差しと、その口元にかすかに浮かぶ微笑み。炊き出しの鍋の底を舐める焔。刈り取られてゆく黄金の稲。たわわに実った林檎。祭りの舞い。これは災害の傷跡をなぞる映画ではなく、ただひたすらに被災地に生き続けている人々と、土地と海を、あるがままに見つめて撮られたドキュメンタリーである。そこに、作為のない、ピュアで、暖かな監督の視線を強く感じる。どの場面も、心に残り、どの言葉も、腑に落ちる。

震災から6年後、福島県ではおよそ8万人の人々が避難生活を続けており、原発から北へ約15キロ、南相馬と浪江町境のある牧場では、今も315頭の牛が飼われているという。

国は、被爆した牛を、殺処分しろという。しかし牧場主、吉沢正巳さんはそれを聞き入れず、何の利益を生むことのない牛に水をやり、餌を与え続けている。国の指示に従い、牛を置き去りにし、餓死させた他の牛飼いたちを、彼は責めない。同じ牛飼いとて、生き物を見殺しにした仲間たちの苦しみを知っているからだ。しかし、そのような苦しい立場でひとり踏ん張りながら、なお、去って行った仲間の痛みを理解するというところに、涙が溢れた。

「幾通りも正しさがあって、みんな全部正しい。殺処分、餓死、遠くに逃げた人たち、

全部正しいと言うしかないと思う。間違っていない・・・全部正しいんだというふうに言うべきだよ。その、言葉と、口調と、間と、表情。血のにじむような苦勞を重ねに重ね、おそらくは男泣きに泣くことも何度もあったであろう運命を必死に生きて、その末に出てきた言葉の重み。人としての深さ。

何が正しくて、何が間違っているか。人はどうあるべきか、どうあってはいけないか。一つ物差しで測らない、いや、測りきれないことがあるのだと、吉沢さんの言葉が、私の肩をゆさぶる。

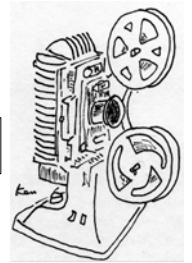
大らかさや豊かさだけではない、同時に、自然は恐ろしい狂気と破壊力を孕んでいることを、私たち人間はしかと肝に銘じなくてはならない。自然とは、私たちの対極にあるものではなく、私達自身がすでに「自然」の一部であり、人間は、自然によって生かされ、自然によって抹殺される存在なのである。「自然」は私たちに惜しみなく与え、有無を言わずに奪ってゆく。その不条理こそが「自然」なのである。

人間と自然の共存が可能であるとすれば、それがいかなることかを私に示唆してくれたのが、この『一陽来復』である。(さっぽろ映画サークル10月号から)

北海道新聞 2018.8.20 掲載

ブエナ・ビスタ・ソシアル  
・クラブ★アディオス

ルーシー・ウォーカー監督



2000年に公開された音楽ドキュメンタリー「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」

はアメリカの偉大なギタリスト、ライ・クーダーがキューバでセッションした地元の老ミュージシャンたちに声をかけて結成された、ビッグバンドの日常を描いていました。キューートなおじいちゃんパワーに圧倒され、陽気な音楽の素晴らしさに引き込まれて2回も観た大好きな映画です。

あれから18年「アディオス世界ツアー」を決めたメンバーたちの人生、そしてキューバ音楽の歴史に迫ったのが今作です。

メンバーの言葉がいいです。「俺は遅咲きだったが、人生の花は誰にも必ず訪れるよ」

「人の命は奪えても、歌うことは奪えない」「最後の瞬間までうたっていたい」と語るオマールの言葉に泣きました。

音楽は言語を越えて人の心を結びと実感しました。いつかキューバに行って彼らの音楽に触れたい。

■泊廃炉訴訟の意見陳述をすることになり、紙面に入れることにしました。■映画の紹介が1本しか掲載できませんでしたが「ラッカは静かに虐殺されている」「バトル・オブ・ザ・セクシーズ」「アリフ、ザ・プリンセス」など紹介したかったです。■「一陽

ミニコミ誌「銀河通信」発行30年

2018



樋口 みな子さん

会員向けミニコミ誌「銀河通信」を発行して30年になった。環境や人権問題などを時事問題に重ねてつづり、江別から発信する。7月下旬の208号で「小さな声を届けたいと思った」と創刊時の動機を振り返った。小さな声も集まると大きな力になる。私のような普通の主婦が感じたことを伝えたい。

長男の生まれた1986年にチェルノブイリ原発事故が起き、社会問題への関心が高まった。2年後の夏、B4判の表裏に手書きで創刊した。今は2カ月に1度、A4判8頁をパソコンで編集する。当初20人だった読者は今、インターネット会員と、年間千円で郵送する会員が国内外に計600人いる。「読んでよ」「次号も楽しみ」という読者の声が何よりの励みだ。脱原発や自然保護、平和や人権擁護など題材は幅広い。沖縄の戦跡やアウシュビッツ強制収容所を訪ねたルポも書いた。安全保障関連法が成立した3年前の夏は反対集会やデモに連日通い、紙面で紹介した。「自分で見て聞いたことを自分の言葉で伝えることにこだわっている」と話す。心に残った本や映画も毎号4、5本を紹介している。

日高管内平取町生まれ。大阪の企業や旭川の病院の臨床検査技師を務め、85年、結婚を機に札幌へ。今は江別市内で天文好きの元中学教諭の夫澄生さん(65)と暮らす。「銀河通信」には「夜空の星のように多くの人に届きますように」との願いを込めた。69歳。(関口裕士)

購読料と寄付ををありがとうございます 来復」は原発には少ししか触れられていませんが、人類とは共存できないと映像が無言で語っていると思いました。(敬称略) 7.30~9.28

村田和代/宮本紀子/袴田絵梨奈/新妻徹/中川洋子/川嶋新太郎/片山篤子/小林汎/高橋儁(切手も)/加藤伯子/三露久男/土沢美佐子/福島清/金尾誠一/新井喜美子/鈴木ゆかり/藤田春美/湯本まさえ/クッキングハウス(お見舞い)/佐々木睦子/水野スウ(著書)/折出健二(著書)合計78000円(お見舞いも含む)は印刷と送料に使わせていただきます。また著書の寄贈もありました。合わせてありがとうございます。208号が12ページで赤字になりました。今回の寄付などから補填させていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 引き続きご支援をお願いします。